

題字 故前田和二郎名誉教授  
発行所 東京都新宿区信濃町 35  
慶應義塾大学医学部  
外科同窓会  
発行人 山本修三

# 脳神経外科 50周年



慶應義塾大学  
外科 (脳神経) 教授  
吉田 一成 (59回)

慶應義塾大学におきましては、大教室制を取っておりますので、脳神経外科は、外科学教室の1診療科です。脳神経外科学教室というものはありませんので、脳神経外科の始まりをいつとするかは、いろいろな考え方があると思います。が、この度、故工藤達之先生が、初めて脳神経外科担当として外科学教授に就任された1962年10月22日を慶應義塾大学脳神経外科創設の日とさせていただきます。脳神経外科の同門会であるこぶし会を中心に、50周年記念誌を編纂いたしました。工藤教授退任後、7年間、脳神経外科は、教授不在の時期を経験いたしました。1984年4月、戸

谷重雄教授が就任された際に、同志により、こぶし会が結成され、河瀬斌教授の時代を経て、このこぶし会は、脳神経外科の同門会としての地位を確立いたしました。2010年、私が教授に就任した際に、こぶし会会長の市来壽潔先生から、教授不在の時代に散逸した資料なども掘り起こして、脳神経外科の歴史を後世に残そうという申し出がありました。しかし、言うに易く、行うに難い、大事業でした。歴史を紐解くと、工藤教授の教授就任が、1962年であったことから、2012年を節目として、50周年記念誌として、記録を残すことになりました。大谷光弘先生を編集長



とする、10名あまりの委員を要する編集委員会が招集され、2年越しの大事業となりました。記念誌の編纂に当たり、私は、「Neutral」という、スタンスでの編集をお願いしました。その時代、時代で行われていたこと、起きたことなどを、なるべく当時の言葉で、編集にかかわる人たちの考え

で飾せず、正確に残そうという趣旨でした。また、記念誌の編纂以外には、50周年を記念した特別な催しは行わず、ちょうど50年に当たる、2012年11月に、河瀬教授の時代から行われているKNC脳疾患研究会を一つの節目の会とし、2013年4月のこぶし会総会で、記念誌を配布することとしました。記念誌は、各診療科に贈呈させていただきたいと思っておりますので、よろしければ、ご一読いただければと思います。脳神経外科の歴史の多くを正確に後世に残せる内容になったと思います。この50年、脳神経外科領域では、「Macrosurgery」から、Microsurgeryへと大きな変革があり、CT、MRIの導入、最近では内視鏡手術、血管内治療、放射線療法、血管内治療、放射線療法、安全性をより求められるようになり、目まぐるしい変化があります。これから、慶應脳神経外科を支えていく若い医師たちに、先人の努力を多少なりとも伝えていきたいと思います。これからの50年、慶應脳神経外科が一流の医療を提

## 第36回慶應外科フォーラム

### 開催報告



慶應義塾大学  
外科 (一般・消化器) 教授  
北川 雄光 (65回)

供し続けることができるよう、同門一同、研鑽を積んで参りたいと思います。

さて、慶應外科フォーラムの概要につき、あらためまして紹介させて頂きました。慶應外科フォーラムは、阿部令彦教授(現名誉教授)時代に、おもに癌治療に関する基礎・臨床研究を関連病院の先生方とともに推進する場として創設されました。さらに北島政樹教授(現名誉教授)の時代に、移植医療、内視鏡治療、医工連携など新しい分野をとりいれ、関連病院もふくめた教員からの症例報告や研究発表、さらにその年の日本外科学会会頭あるいは日本消化器外科学会総会会長など日本のリーダーとして活躍されている先生方を特別講演の講師としてお招きする形で発展して参りました。

また、さらに前田昭二先生(33回)前田京助先生(61回)のご厚意により前田賞が創設され、慶應外科フォーラムの会場で表彰して参りました。前田賞は卒業10年までの若手教室員ですぐれた研究業績をあげ、その成果を英文論文として発表した者1名に副賞としての研究助成金とともに授与されます。

さて、私が一般・消化器外科を担当させて頂いてから丸6年が経過いたしました。慶應外科フォーラムの運営も少し変化しました。まず、この慶應外科フォーラムを一般・消化器外科の最重要行事の一つとして位置づけ、大学スタッフ、後期研修医と関連病院の先生方ならびに関連病院に出張中の初期臨床研修医、後期研修医との重要な交流の場としております。発表形式も一新し、まず関連病院の外科学部長の先生方に関連病院の近況報告を行っていただき、新病院建築構想、新たな臨床面での取り組み、初期・後期研修医への教育における工夫などについて発表を行っていただいております。年々変化する各関連病院の動向、発展の様子を皆で共有させて頂くいい機会となっており、本年第36回では6人の先生方にご発表いただきました。

次にセッションでは学内の臓器班による研究紹介と、リサーチ班を指導・統括するPI (Principal Investigator) による発表を隔年交互に行っており、今年は基礎研究グループの先生5名より発表が行われ、活発な質疑応答が行われました。若手スタッフが取り組んでいる最先端の研究を関連病院指導者の先生方、これから研究をはじめめる初期・後期研修医の諸君に紹介するいい機会になっております。次のセッションでは、海外留学より帰国した教室員からの帰朝報告が5名より行われました。出張中の後期研修医、これから外科を志す初期臨床の諸君が将来のキャリアパスを考えるうえで貴重な情報となるものと考えております。

次いで私が例年通り、一般・消化器外科の運営方針について述べさせて頂きました。本年は後期研修医修了後数年間の人事の流動化をさらに推進する構想についてご説明させて頂きました。引き続き前田賞の授賞式に移り、今年度は平野祐樹君(84回)が同賞を受賞いたしました。

最後に、第113回日本外科学会会頭 九州大学大学院 消化器・総合外科教授 前原喜彦先生に「次代の外科学」について特別講演をいただきました。基礎から臨床にわたる幅広い分野でのこれまでの研究成果や、現在推進中の先端的がん治療戦略や技術開発、これからの外科学が進むべき方向性について大教室を率いる総帥として日本外科学会を代表するお立場から素晴らしいご講演いただきました。あらためて九州大学大学院 消化器・総合外科の伝統と実績に我々参加者一同大きな感銘を受けました。この後、同商工会議所内に会場を移して懇親会が開かれ、会は盛会のうちに閉会となりました。来年は2014年1月25日(土)に第114回日本外科学会会頭 京都大学大学院肝胆膵・移植外科教授 上本伸二先生を特別講演の講師としてお迎えして開催する予定です。多くの刀林会員の先生方にご出席賜りますようお願い申し上げます。

# 富士重工業健康保険組合

## 太田記念病院院長退任



富士重工業健康保険組合  
太田記念病院 名誉院長  
難波 貞夫 (46回)

平成16年6月に病院長を引継いでから平成24年9月に退任するまでの8年間を振り返りますと、院長就任初期は、医師不足が顕著になった時期でもありました。大学から、医師の引き

上げを次々と言い渡されました。当院ではまず小児科、次いで麻酔科がそれぞれ部長のみという事態になったため、医師集めに奔走しました。結局他大学医師や内科医全員が退職し、産婦人科医も2名にまで減って

しまい、分娩を中止する事態になりました。この時に最も医師数が減少し、その後少しずつ増えてきています。一方院長就任時より新病院建築の計画が検討されました。老朽化した主病棟と、市民からの要求により、病床数を増やすため次々と増築していった結果、院内が迷路のような構造になってしまいました。職員でさえ、働きにくい環境になっていました。また外来患者が多くなり、駐車場が狭くなったために持ち上がった計画でした。地域の基幹病院であり、災害拠点病院であったことから太田市、群馬県からの援助を得ることが出来ることになり、病院の移転新築計画が実施されました。院長就任後半は医師招聘活動と新病院建築準備のため、忙しい時期となりましたが、全職員協力のおかげ

で、何とか機能的な病院をつくりあげることが出来ました。新病院の内容については市より小児科、産婦人科と救急医療の充実を、また県からは第3次救急医療の要請を受け、さらに医師招聘に奔走し、新病院開設までに何とか要請に応える体制を整えることが出来ました。しかし一般内科、消化器内科医師を招聘できなかったことには悔いが残ります。病院名を総合太田病院から太田記念病院と変え、平成24年6月1日に旧病院から直線で約700m程はなれた新病院に移転しました。そして移転後の混乱が落ち着いてきた9月に退任することになりました。終わりに、これまでご協力を頂いた多くの方々に感謝いたします。

# 埼玉医科大学病院

## 急患センター教授就任



埼玉医科大学病院  
急患センター教授・センター長  
芳賀 佳之 (61回生)

このたび17年勤続したさいたま市立病院を退職し、埼玉医大病院急患センター教授兼センター長に就任いたしました。埼玉医科大学は毛呂山(大学病院)、川越(総合医療センター)、日高(国際医療センター)の三地区に病院があります。平成19年に国際医療センターが開設された際、救急医療の機能の多くが毛呂山の大学病院から国際医療センターに移されました。このため本拠であった大学の病院の救急医療機関としての機能が低下してしまいました。したが、地域の基幹病院であるため依然として多くの救急患者を受け入れざるを得ない状態です。

私に課せられた最大の任務は毛呂山の大学病院の救急医療体制立て直しであると考えております。しかし、いまだ医局員も少なく、いかにして少数のスタッフで多くの救急患者に適切に対応するか、日々頭を悩ませております。二次救急病院であるにもかかわらず、大

# 静岡赤十字病院院長就任



静岡赤十字病院 院長  
磯部 潔 (54回)

静岡赤十字病院は、昭和8年に開院し、今年で満80年になります。私は昨年の4月から第六代の院長とな

りました。第三代院長福田榮(32回、脳外科)、第四代院長山田史(46回、脳外科)らは刀林会員であられ

ます。当院の常勤医125名中、三四会員は、39名で、刀林会員は8名です。院長磯部潔(54回)、副院長森

俊治(57回)、東茂樹(特、心外)、西海孝男(60回)、中山隆盛(特)、外科部長白石好(72回)、小林秀昭(特)、石井賢二郎(85回)です。市内開業医には、東泉東一(特)、山岸孝男(32回)、宮田潤一(55回)などがおられます。

現在、当院は新築中で、平成28年秋に465床で完成予定です。救命救急センターを備え、高度医療に対応できる医療機器と快適な療養環境で、周産期、脳卒中、血管、脊椎、不整脈、血液・骨髄移植、糖尿病、リウマチ、各種がんなどの疾患に対する治療、及び経鼻内視鏡を中心とした健診事業などを充実させます。また、地域医療支援病



院として、密な病診連携を構築し、地域密着型の医療を展開します。当院の誇れることは、職員が協力し合い、安全で質の高い、チーム医療の実践を目指して頑張っていることです。今後はさらに患者さんへのサービスの向上を目指します。

当院の理念である、「人道」「博愛」の赤十字精神のつとめ、安心して身を任せることができる医療を提供するために、病院の運営、マネージメントを中心に院長としての責務を果たしてまいります。

今後ともどうぞ刀林会の先生方のご指導、ご協力をお願い致します。

# 東海大学医学部消化器

## 外科教授退任のご挨拶



日高病院 臨床腫瘍科  
生越 喬二 (50回)

私は、昨年(2012年)3月末で、東海大学医学部消化器外科を退任いたしました。1971年に慶應義塾大学医学部を卒業し、親父と同じ外科医になろうと思つて、阿部令彦教授が主宰されていた一般外科に入局し、川崎市立病院外科で、3年間のスパーローテーションを過ごして以来、38年間に及ぶ大学生活をスタートしました。まずは、長い年月にわたりお世話になった刀林会の皆様に、今この紙面をお借りして心からの感謝を申し上げます。

1977年7月に消化器外科助手として、東海大学医学部にお世話になって以来、35年間にわたる東海大学消化器外科での大学生活に無事にピリオドが打たれたこと、新たな地に義塾の根を植え、東海大学医学部の目標である良医を育成することに貢献できたことは誠に幸せでした。三富利夫教授主宰の東海大学消化器外科(当時は第二外科)に助手として赴任した当時は、三富利夫先生、田島知郎先生以下、数名のスタッフと

# 東京医科歯科大学大学院肝胆膵総合外科

## 教授就任にあたって



東京歯科大学大学院肝胆膵総合外科教授  
田邊 稔 (64回)

2013年4月1日付けで東京医科歯科大学大学院肝胆膵・総合外科教授を拝命し、過日赴任いたしました。まず、赴任に際しご尽力いただきました末松医学部長、武田純三病院長をはじめとする慶應義塾大学医学部の諸先生方、ならびに迎えてくださった東京医科歯科大学の皆様から感謝申し上げます。

東京医科歯科大学は、1928年に湯島の地に東京高等歯科学校として開校、1944年に医学部を併設して東京医学歯学専門学校となり、1946年に現在の東京医科歯科大学の名称になりました。JRお茶の水駅から眺める東京医科歯科大学は、「最近次々と大きなビルを建てていく」との印象を持つ方が多いと思います。その医学部/病院の大改築は1991年からスタートし、最近では2009年に26階建ての巨大なM&Dタワー(医学部/歯学部研究棟)が完成しました。私が赴任した肝胆膵/総合外科の研究室と

オフィスはその12階に位置します。東京医科歯科大学付属病院は総武線の駅前にあり、病院としては好立地条件ですが、至近距離に順天堂大学、日本大学、東京大学、日本医科大学があるため、慶應以上の大学病院の激戦区に位置します。そのため付属病院では、極めてアカティビティの高い救命救急センターや、難病のトータルケアを目指す先端医療センターを設置するなど、特徴ある高度医療を展開しております。

東京医科歯科大学の外科はもともと第一外科と第二外科に分かれていました。が、何度か再編を繰り返して、現在は私が赴任した肝胆膵総合外科、食道/一般外科(河野辰幸教授、食道/血管)、腫瘍外科(杉原健一教授、大腸/胃/乳腺)の三つの講座に分かれております。東京医科歯科大学の三四会員としては、渡辺守先生(58回)が消化器内科教授として活躍ですが、私の知る限り現役の大学教員は私が二人目でありませぬ。

私は、1985年に塾医学部を卒業し、阿部令彦名誉教授(30回)が主催された一般・消化器外科の門をたたきました。胆道班では都築俊治先生(34回)、故上田政和先生(53回)から肝胆膵外科と学位論文のご指導を受けた後、1991年より3年間、当時創世記にあつた臓器移植を学びに米国ピッツバーグ大学移植外科へ留学し、スタートル教授の師事を仰ぎました。1999年からは北島政樹名誉教授(45回)の命により一般・消化器外科胆道班のスタッフとして帰室し、島津元秀先生(53回、現東京医大八王子医療センター教授)、若林剛先生(61回、現岩手医科大学教授)のもとで、生体肝移植の立ち上げに携わるとともに、腹腔鏡下肝切除や凍結治療など先進的な低侵襲治療を学びました。その後、2008年より一般消化器外科教授に就任された北川雄光先生(65回)のもとで、肝胆膵/移植班班長を務めさせていただいたことは、高度医療に耐えうる良いチームづくりと、若手を育成する上

で大変良い経験になりました。医師になってから28年、慶應医学のもとで多くの先生方から学んだことを、東京医科歯科大学においてさらに発展させる所存です。

肝胆膵領域は難治病が多く、外科的には高難度手術を要求される特殊な領域です。個々のメンバーが専門性を追求する一方で、肝胆膵外科領域の診療を偏り無く総合的に実施する力を持つことが時代の要求であり、これを教室の体制として維持することが基本と考えております。一方、大がかりな診療体制を要する肝移植医療や、先進的な腹腔鏡下肝/膵切除などの低侵襲治療は、大学病院として提供すべき医療であり、これまで経験を生かして当地においても今後発展させる所存です。肝胆膵領域悪性疾患の分野では、抗癌剤や放射線治療を含む集学的治療の役割が増しつつあります。単一診療科としての実績にとらわれず、手術で採取した検体や臨床情報の研究部門への提供や、関連病院との多施設共同試

験を遂行するなど、部門や施設を越えたシステムの構築は最も重要な課題と考えております。また、最難関とされる日本肝胆膵外科学会高度技能専門医資格を取得するためには、関連教育施設やハイポリウムセンターとの連携を強化し、入局後10年間の総合的教育計画を策定する必要があります。若手医師にとって魅力あるキャリアパスを提示することは、優秀な人材を集め、教室を発展させるために重要であると考えております。

肝胆膵外科の臨床は、もとより他の診療科やコメディカルをはじめ、多くの部門との密接な連携の上になり立っております。これまで慶應義塾大学病院において、多くの皆様に支えられて素晴らしいチーム医療を行うことが出来たことを、心から感謝いたします。東京医科歯科大学においても、まずは良いチームをつくり、信頼される診療体制を構築することから着手し、将来的には我が国における肝胆膵外科の発展に存在感をもって貢献できるよう努力したいと考えておりますので、刀林会の皆様の一層のご指導、ご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

### 善意と医療のかけ橋

2012年10月1日よりベネシスと日本赤十字社の血漿分画事業部門は統合し  
一般社団法人 日本血液製剤機構 として事業を開始しました

日本血液製剤機構  
Japan Blood Products Organization  
http://www.jpbo.or.jp

# 第25回日本内視鏡外科学会総会

## を担当して



国立病院機構 東京医療センター  
病院長  
松本 純夫 (52回)

第25回日本内視鏡外科学会総会を平成24年12月6日から8日にかけてパシフィコ横浜において開催しました。総演題数2,257、参加者は4,319名と過去最多でした。主題は「面より空間を拓く、五感より視覚・触覚を磨く」としました。これは内視鏡外科医である私の実感を表しています。内視鏡は、一つ目は消化管を外孔部から内視鏡を挿入するもの、二つ目は解剖学的空間を形成する胸腔や腹腔に内視鏡を挿入するもの、三つ目は本来解剖学的な空間のない後腹膜や筋膜下、血管・神経周囲などに人為的に空間を作って観察や手術をするものです。「面より空間を拓く」は三つ目の技術を意味します。今までは技術の習得に

は二次元のモニターを通して、立体的な深度感覚を養う必要がありました。そのために「視覚や触覚を磨く」必要があるという意味です。

Albert, Hogan, Scott 先生、国内からは宇山、能城、坂井、大平教授らに参加してもらいました。熱演で予定時間を大幅に延長し、私

の会長講演も短かく早口で話すはめになり司会の北島先生にもご迷惑をかけ反省するばかりでした。

3D内視鏡はオリンパス、カールストルツ、パナソニック三社製品を画像評価、疲労度、使用期待感などの観点からアンサーパッドで集計し、参加者からハイビジョン3D内視鏡臨床

機への期待が大きいと感じました。医工連携は経産省関東経済局と日本医工ものつくりコムンズとの共催、および独立行政法人医薬品医療機器総合機構 (PMDA) からの後援を得て行いました。シーズをもった中小企業からの発表、魅力的な技術を持つ東京大学正宗研究室、広瀬・谷川研究室、東京慈恵会医科大学呼吸器外科、早稲田大学高西研究室からの機器展示は好評でメーカーが真剣に聞いている姿があり、試みとしては成功したと感じています。

海外からの国際名誉会員の講演には船曳孝彦、丸山圭一に座長を務めていただきました。学会の演題数が多かつたため当初計画を変更し会場数を18から20会場にしたが、個々の発表時間が少なく討論時間に制約があつたことは反省しています。

司会の労をとっていただいた刀林会の先生方の協力には紙面を借りて御礼申し上げます。



このたび、第831回外科集談会を平成25年12月21日にソラステイターカンファレンスセンター(お茶の水)にて開催させていただきます。外科集談会は遡ること110年、東大佐藤三吉教授など東京近郊の著名な外科医14名が集まり、ドイツはベルリンの外科専門家自由協会 Freie Vereinigung der Chirurgen Berlins の組織に倣い、明治35年(1902年)に創設され、第一回が行われました。発足当初は月1回のペースで行われておりましたが、今日では年4回の開催となっております。これまでに800回を優に超える開催回数を誇る歴史と由緒ある学術集会です。本会は、外科学に関する諸問題を広く研究することを目的として設立されており、若手外科医の登竜門的位置づけとなっております。日常臨床の場で経験する、診断が困難だった症例、や手術が困難だった症例、



治療経過がめずらしかつた症例など、是非この機会に持ち寄って、基本に立ち返って皆が討論できる場を提供できれば幸いです。日々現場で奮闘している若手外科医の積極的な発表を心よりお待ち申し上げます。演題登録などの詳細についてはホームページ (<http://shudanka.u-min.nip/index.html>) をご参照いただければ幸いです。

第831回外科集談会が充実した実りある会になりますよう、刀林会の先生方のご指導とご協力を是非ともよろしくお願い申し上げます。

# 第831回外科集談会



北里大学医学部外科  
教授  
渡邊 昌彦 (58回)

astellas

免疫抑制剤 (タクロリムス水和物製剤) **プログラフ** カプセル

注注射液 2mg/5mg  
0.5mg/1mg/5mg  
顆粒 0.2mg/1mg

Prograf®

製造販売 アステラス製薬株式会社  
東京都板橋区蓮根3-17-1  
【資料請求先】本社/東京都中央区日本橋本町2-3-11

CHUGAI 中外製薬

Roche ロシュグループ

at the Front Line  
CHUGAI ONCOLOGY

抗悪性腫瘍剤  
劇薬、処方せん医薬品(注)

**ゼロダ錠300**

Xeloda® カベシタピン錠

注) 注意—医師等の処方せんにより使用すること  
® F. Hoffmann-Larocha (スイス) 登録商標

※効能・効果、用法・用量、警告、禁忌を含む使用上の注意、効能・効果に関連する使用上の注意等については製品添付文書をご参照ください。  
<http://www.chugai-pharm.co.jp>

製造販売元 中外製薬株式会社 | (資料請求先) 〒103-8324 東京都中央区日本橋室町2-1-1  
2009年6月作成

# 第2回日本腹腔鏡下ヘルニア手術 手技研究集会



平塚市民病院  
中川 基人 (66回相当)

本年2月9日に第二回日本腹腔鏡下ヘルニア手術手技研究集会(ラパヘル研究会)を当番世話人として担当させていただきました。御報告申し上げます。

ラパヘル研究会では演者の提示するノークットのラパヘル手術動画を見ながら演者、座長、フロアが自由に討論を行います。パシフィコ横浜に300人分のテーブル席と2面の大スクリーンを設け、合計22演題の手術動画と識者による3つのセミナーで参加者にはどっぷりとラパヘルに浸っていたいただきました。午前10時の開会後、お昼前にはほぼ満席となり、夕方の閉会まで退席者がほとんどなく満席状態が続きました。この盛況ぶりは今ラパヘルに多くの外科医が注目していることの表れと思います。ラパヘルは優れた治療であると同時に保険診療点数の面でも高い評価を受けていることから施行症例数が激増しています。一方で私

はラパヘル施行の際に忘れてはならないポイントが二つあると考えております。一つはたかがヘルニアの治療とはいえラパヘルには繊細かつ多岐にわたる鏡視下手術手技の熟練を要する点、もう一つは手術に必要な解剖理解が前方アプローチによるヘルニア修復術と異なるという点です。甘く見ると痛い目にあう手術でもあります。

このようなラパヘルが安全かつ有効な手術としてより普及することに役立ちたいと思います。昨年9月に世話人をお引き受けしました。全国規模の学術集会運営は初体験であり、しかも準備期間が5カ月と極めて短かったため、会場選定、プログラム作り、座長や指定演者の選定、セミナーの企画等、まさに準備に追われました。そんな中、協賛各社への依頼では北川雄光教授が直々に応援文を作成してくださり、大きな後押しをしてくださいました。一



関連施設に勤務する身ではあります。改めて慶大外科の連帯の強さを体感いたしました。研究会の主催は単発的な活動に過ぎません。しかし、今回の経験は「質の高い手術を可能な限り数多く平塚地域の住民に提供する」そして「臨床的対処能力の高い外科医を一人でも多く育てる」という平塚市民病院外科の理念実現に大いに役立ちそうだと感じています。今後とも刀林会緒先生方の御指導御鞭撻を賜りたくよろしくお願い申し上げます。

# 第9回日本在宅静脈経腸栄養研究会 学術集会を終えて



藤田保健衛生大学 櫻井 洋一 (61回相当)  
(現 和洋女子大学家政学群健康栄養学類人間栄養学研究室教授)  
千葉県済生会習志野病院外科 (非常勤)

平成24年10月20日、JR名古屋駅前ウイंकあいち(愛知県産業労働センター)にて第9回日本在宅静脈経腸栄養研究会学術集会を開催させて頂きました。世界的にも急速な速度で高齢化するわが国の現状から外科医も高齢患者を診療する機会が飛躍的に増加しています。高齢消化器外科患者の術後は合併症を高率にきたし、経口摂取不良により長期間にわたり栄養状態不良の患者も数多く認められることから外科医にとってもQOLの改善を図るべく在宅医療が不可欠になっていきます。在宅医療の中でも栄養管理が患者のQOL改善に不可欠の重要な治療であり、このような社会状況のなかで本研究会を主催させて頂いたことは大変に光栄に存じます。本研究会は医師、栄養士、看護師、薬剤師、検査技師、ソーシャルワーカーなど、在宅医療に関わるすべての職種の方々が一同に

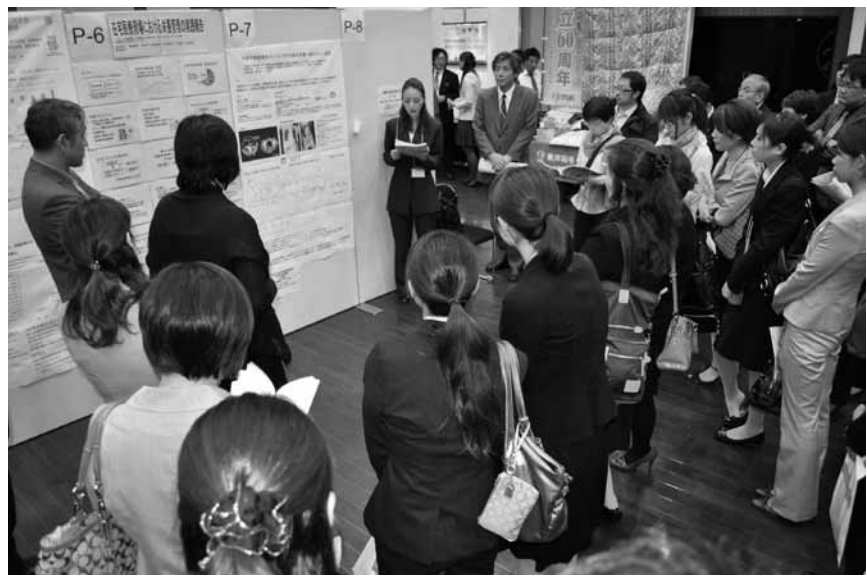
会し、「患者の状態や病態に応じた適切な在宅栄養療法とは何か?」を議論し尽くすことが目的の研究集会です。その趣旨に沿いベストな在宅栄養管理を施行する上で重要な「在宅患者に対する栄養アセスメント」「在宅栄養管理におけるメデイカルスタッフの役割」「在宅静脈栄養におけるカテーテル管理と感染予防」「誤嚥性肺炎の予防対策」「在宅栄養におけるPEGカテーテル管理」「在宅経腸栄養管理における成分栄養剤の役割」「短腸症候群に対する在宅栄養管理」の7つのトピックス(主題セッション)をメインテーマとして設定しました。各領域の主題に対しエキスパートの先生方にコーディネートをお願いし、一部指定タリをお願ひし、一部指定とし指定演者をご指名いただきました。また一般演題では臨床栄養で特に重要と考えられる貴重な症例をポスターでゆつくりと閲覧しながら職種をこえて活発に

議論することができました。また特別講演、ランチョンセミナーも企画し研究会としては少々欲張ったプログラムとなりました。外科栄養領域では著名であった元大阪大学故岡田正名名誉教授の後任で昨年大阪大学を退任された福澤正洋本研究会代表世話人(現大阪母子医療センター総長)にも「今回の研究会は参加者も倍増し大変に盛会であった」とお褒めの言葉を頂き、大変にうれしく思った次第です。今回は参加をフェイスブックにイベントページを立ち上げて参加を呼びかけたことも多くの参加者が得られたことにつながったと考えており、近年の新しいコミュニケーションツールを利用することも大変に有意義なことであることも学ばせていただきました。今後学会を主催される先生方にご参考になれば幸いです。

今回の学術集会は在宅に関わるすべてのメデイカル

スタッフを含め計183名の多数の参加者に恵まれ、活気に満ちた研究会となりました。伝統ある本研究会を例年以上の盛会にて終了

できたことは先生方の日頃のご努力と慶應外科の伝統の賜と大変に感謝しております。次第であります。



スタッフを含め計183名の多数の参加者に恵まれ、活気に満ちた研究会となりました。伝統ある本研究会を例年以上の盛会にて終了

# 第28回日本小児救急医学会

## 学術集会



東海大学医学部外科学系  
小児外科学 教授  
上野 滋 (57回)

第28回日本小児救急医学会学術集会を平成26年6月6日(金)と7日(土)の2日間、横浜パシフィコ・アネックスホールで開催された。日本小児救急医学会は、小児救急医学・医療の進歩発展を目指して昭和62年に発足し、小児救急診療に関わる小児科、小児外科、脳神経外科、集中治療科などの医師だけでなく多職種の会員が相互理解と連携を深めながら活動している日本小児科学会の分科会です。学術集会開催はその中心的な事業であり、これまで刀林会の諸先輩により開催されてきた歴史があります。わが国の小児救急医療は、0次から3次、すなわち、こどもの変調について受診前に相談を受ける小児救急電話相談(#8000)の事業から中核病院における重症小児専門のICU、PICU(小児集中治療室)の整備といった、一連の政策の枠組みの中で行われています。その担い手は、かかりつけ医、研修医、各学会が認定する専門医や指導

医、日本看護協会が認定する小児看護専門看護師や小児救急認定看護師、救命救急士といった多くの立場、職種の医療従事者であり、チーム医療が求められる領域です。本学会は、「みんなで支えよう、小児救急」をスローガンとして掲げ、これまで、学術集会やセミナーでは会員らの経験や知恵が披瀝されてきました。が、重症患児の救急搬送、小児脳死判定、虐待、集中治療といった重く難しい課題にも取り組み、挑戦を続けています。

第28回学術集会は、様々な診療場面における連携をイメージし、「つながる・つなげる救急診療―初期対応から在宅医療まで―」をテーマとして開催いたしました。少子化社会の

中で子育てに悩む親のニーズにいかに対応するか、軽症から重症まで多くの患児をいかに適切に診療するか、急性期を乗り越えた後に待つ問題に目を向けいかに解決するか、といった課題について、職種間のつながり、家庭―病院―家庭のつながりを円滑にするための知恵を集め、今後を生かせるような会になればよいと存じます。急病やけがのこどもたちを治して家族のもとに返すという喜びを参加者が共有できるように、学会の目的に則り、微力ながら本学術集会の準備と開催に全力で臨みたいと考えています。刀林会諸兄におかれましては、誌上ではありますが、何とぞよろしくご助言ご支援いただきますよう、お願い申し上げます。

# 第50回日本腹部救急医学会総会



慶應義塾大学  
外科(一般・消化器) 教授  
北川 雄光 (65回)

来る平成26年3月6日、7日の2日間、京王プラザホテルにて第50回日本腹部救急医学会総会を開催させていただきましたこととなりました。

節目となる50回目の総会会長をご指名いただき大変な栄誉であると同時に重責に身の引き締まる思いであります。

本学会総会の基本理念は「若手の登竜門」であります。数多くの学会があるなか、専門医制度などのインセンティブがないにもかかわらず、本学会総会が例年1000題以上の演題と2000人以上の参加者があり活況を呈しているのは、歴代会長がこの理念を掲げ受け継いできたからこそだと思います。

今から30年前の1983年、北島政樹名誉教授(本学会名誉会員)は、高田忠敬名誉理事長(帝京大学名誉教授)、平澤博之名誉会員(千葉大学名誉教授)の計3名を中心メンバーとして、本学会の前身である日

# 第50回日本移植学会



第50回日本移植学会総会 会長  
東京医科大学外科学第五講座 主任教授  
八王子医療センター消化器外科・移植外科  
島津 一元秀 (53回)

このたび第50回日本移植学会総会を平成26年9月10日(水)〜12日(金)の3日間、東京で主催させていただきましたこととなりました。

日本移植学会は、移植およびその関連分野の進歩普及をはかるとともに人類の福祉に貢献することを目的として、1965年に設立された我が国における移植領域最大の学会であります。

我が国では、1997年の「臓器の移植に関する法律」(臓器移植法)施行で、脳死体からの臓器提供による移植が初めて法的に認められ、2010年の改正臓器移植法施行により、本人の意思表示がなくても家族の書面承諾で脳死移植が可能となりました。その際、日本移植学会は国民の啓蒙ならびに政治・行政への働

いえ、諸外国に比べ未だに極端に少ないのが現状であります。2008年の国際移植学会イスタンブール宣言では、自国の臓器提供は自給自足で行われるべきであると謳われており、WHOもそのように勧告しています。従って、我が国における移植医療の更なる発展・普及は喫緊の課題であり、そのために日本移植学会が果たすべき役割は極めて大きいものがあります。

刀林会員として本学会を主催するのは小生が初めてであり、慶應義塾大学外科学教室における肝移植ならびに小腸移植の実績が高く評価されたものと存じます。小生のみならず本学会にとりましては大変な名誉なことと思つと同時に、大きな責任を感じるものであります。

さらに今回は第50回の記念すべき総会であり、日本移植学会1世紀までの折り返しに当たります。この節目の総会を開催するにあたり、それにふさわしいイベントならびに記念誌の発行など多くの事業を計画しなければなりません。過去を振り返り先人の業績を知るとともに、現在から未来に向かつての方向性が打ち出せるような骨太で重要なテーマを選んで企画したいと考えております。

本学会の重要性ならびに今回の総会が第50回記念総会であることをご理解いただき、本総会が十分な成果を上げるため、刀林会会員の皆様から物心両面の絶大なご支援を賜りますようお願い申し上げます。

本学会の前身である日

本腹部救急診療研究会を設立されました。その年の10月1日、記念すべき第1回研究会が京王プラザホテルにおいて盛大に開催されましたが、その本学会の発祥の地ともいえる京王プラザホテルで次期総会を開催できるのも、学会設立の理念に立ち返る上で大きな意義があると存じます。

総会のテーマは「志を未来へ繋ぐ」といたしました。我々は先達が築いてきたこの輝かしい伝統を、志として次世代へ継承し、腹部救急医学の発展と、若手医師の育成、医療現場の環境整備へと進んでいかなければなりません。福澤諭吉先生は「學問のすゝめ」の中で、「大凡世間の事物、進まざる者は必ず退き、退かざる者は必ず進む。進まず退かずして滞滞する者はあるべからざるの理なり」と説いています。この意味するところは、従前の例を踏襲するだけでは退歩していくので、絶えず現状を改善し前

進しなければならぬ、という教えたど解釈しております。創成期からの理念を受け継ぎながら、現理事長の平田公一教授(札幌医科大学)が推進している社会的視点からの学術的貢献や、より良い腹部救急医療に向けた社会体制・医療体制づくりという次世代の大きな課題の解決に向けて一石を投じる学術集会にしたいとの思いから、副題として福澤先生の「退かざる者は必ず進む」の言葉をいただきました。

本会は例年通り年度末の開催となっております。刀林会の先生方におかれましては、ご多用の時期とは存じますが、1年間救急医療の現場で研鑽を積んできた若手医師の発表と慰労の場として京王プラザホテルに足をお運びいただければ望外の喜びであります。何卒、ご指導ご鞭撻賜りますようお願い申し上げます。

# 第33回日本分子腫瘍マーカー研究会

## 腫瘍マーカー研究会



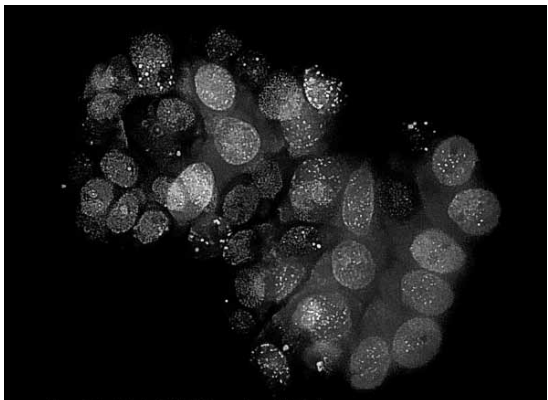
栃木県立がんセンター研究所  
がん遺伝子研究室・がん予防研究室

菅野 康吉 (60回)

本年10月2日(水)にパシフィコ横浜で第33回日本分子腫瘍マーカー研究会を開催します。本研究会は1981年に Functioning tumor 研究会を腫瘍マーカー研究会と改名して開催したのが始まりです。研究会の事務局は阿部令彦先生の時代から慶應の外科学教室に置かれていました。当時は、がん細胞が産生し血液や尿中に検出されるホルモンや蛋白質、糖鎖抗原等に関する研究が主流でしたが、2000年に現在の名称に変更されました。現在、事務局は北里大学外科(渡邊昌彦先生、58回)に置かれています。昭和50年代後半はメスだけでなくピペツトも握れる外科医(現在はピペツトという様ですが)を目指す世代でしたが、小生は試験管を振って癌を診断するのが本職になってしまいました。

例年、日本癌学会前日に同じ会場で開催するのが定番になっており、癌のバ

イオマーカーに関する最新の研究を一日で展望することが出来ます。今年のキーワードは『次世代シーケンサー』、『分子標的』、『Circulating Tumor Cell』、『合成致死』等です。合成致死は、単独では致死性を示さない複数の変異が同時に生じることで細胞死を誘導する現象です。近年、Poly (ADP-ribose) polymerase (PARP) 阻害剤が正常細胞に障害を与えずに BRCA1/2 遺伝子の欠損したがん細胞に細胞死を誘導することが注目されています。この分野の高名な日本人研究者であるフレッド・ハッチンソン癌センターの谷口俊恭先生に『Fanconi anemia-BRCA pathway と抗がん剤耐性メカニズム』という特別講演をお願いしています。皆様のご来場をお待ちしております。



第33回日本分子腫瘍マーカー研究会  
平成 25 年 10 月 2 日 (水) パシフィコ横浜

# 第24回骨盤外科機能温存研究会



第24回骨盤外科機能温存研究会会長  
藤田保健衛生大学医学部  
消化器外科 教授

前田 耕太郎 (58回)

このたび第24回骨盤外科機能温存研究会を、平成26年5月31日(土)に名古屋市金山 ANA crown plaza hotel で開催させていただきますこととなりました。名古屋における総会は、同じく刀林会の先輩であり前任の丸田守人名誉教授が平成13年に第11回を開催されて以来13年ぶりとなります。骨盤外科機能温存研究会は、私の恩師であります小平進先生(前帝京大学外科教授)、寺本龍生先生(前東邦大学医療センター大森病院教授)が、骨盤部の機能温存のために以前より中心的存在として活躍されていた研究会でもあり、第16回研究会は寺本龍生先生が主催されています。このような研究会をお世話させていただくことは私にとっても教室にとっても非常に名誉なことと存じます。

骨盤外科機能温存研究会は、日常生活の QOL (排泄・排尿・生殖) に大きくかわる骨盤内臓器の手

術、機能温存および再建を研究課題として、この分野における医学・医療技術の発展および普及にとめることを目的として、骨盤部の機能温存のために外科、泌尿器科、婦人科、解剖領域などの先生たちが集い、研究を発表し、いろいろな問題を討論する場としてスタートし、第1回の研究会は平成3年に東京で開催されました。骨盤内臓器の異常はこれらの領域に共通して合併することがしばしばありますし、種々のアプローチで現在治療がなされています。



近年、私どもの専門としてます直腸癌治療においても

究極の肛門温存手術を行うようになっていますが、それに代わる肛門機能障害や排尿・性機能障害はいまだ大きな問題です。また、これも私どもの専門とします骨盤内臓器脱 (Pelvic organ prolapse, POP) の治療も婦人科・泌尿器科にまたがる領域でありますし、治療法も多様化し進歩しています。

第24回骨盤外科機能温存研究会が来年名古屋で充実した実りある学会になりますよう、刀林会の先生方のご指導とご協力、またご参加をよろしくお願い申し上げます。

本広告の象は、映画「星になった少年」(2005年公開)に出演したアフリカ象の「ランディ」です。なお、耳と牙は別のアフリカ象との合成です。



**5-HT<sub>3</sub> 受容体拮抗型制吐剤** 薬価基準収載  
劇薬、処方せん医薬品(注意—医師等の処方せんにより使用すること)

**アロキシ® 静注 0.75mg**  
**Aloxi® I.V. injection 0.75mg**  
パロノセトロン静注製剤

効能・効果、効能・効果に関連する使用上の注意、用法・用量、用法・用量に関連する使用上の注意、禁忌を含む使用上の注意等については、添付文書をご参照ください。

資料請求先(医薬品情報室) **大鵬薬品工業株式会社**  
〒101-8444 東京都千代田区神田錦町1-27  
<http://www.taiho.co.jp/>

提携先 **HELSINN** スイス

2012年2月作成

**gsk** GlaxoSmithKline 生きる喜びを、もっと  
Do more, feel better, live longer



抗悪性腫瘍剤/チロシキナーゼ阻害剤 薬価基準収載  
劇薬 処方せん医薬品(注意—医師等の処方せんにより使用すること)

**タイケルブ®錠250mg**  
**Tykerb® Tablets 250mg** ラパチニブトシル酸塩水和物錠

※「効能・効果」、「効能・効果に関連する使用上の注意」、「用法・用量」、「用法・用量に関連する使用上の注意」、「警告・禁忌を含む使用上の注意」等については添付文書をご参照ください。

製造販売元 [資料請求・問い合わせ先] **グラクソ・スミスクライン株式会社**  
〒151-8566 東京都渋谷区千駄ヶ谷4-6-15  
TEL: 0120-561-007(9:00~18:00/土日祝日および当社休業日を除く)  
FAX: 0120-561-047(24時間受付)  
<http://www.glaxosmithkline.co.jp>

提携 [資料請求・問い合わせ先] **日本化薬株式会社**  
〒102-8172 東京都千代田区富士一丁目11番2号  
TEL: 0120-505-282(9:00~18:00/土日祝日および当社休業日を除く)  
<http://mink.nipponkayaku.co.jp/>

2009年10月作成

# 第41回日本膵切研究会



東京歯科大学  
市川総合病院外科 教授  
松井 淳一 (58回)

日本膵切研究会 (Japanese Society of Pancreatic Surgery) は、「PD懇談会」として昭和59年に膵切除の手法、ならびに生理機能に関する研究を行い、その進歩を図ることを目的として設立され、昭和63年11月の第10回より「日本膵切研究会」に発展的に移行しました。この研究会には、創立当時より慶應義塾大学外科の先生方が積極的に関われ、これまでPD懇談会時代に第8回研究会 (昭和62年11月、名古屋) を船曳孝彦先生 (40回生) が、そして第9回研究会 (昭和63年5月、東京・慶應義塾大学病院) を尾形佳郎先生 (41回生) が当番会長として連続して主催されました。その後現在までに、高橋伸先生、菱沼正一先生、相浦浩一先生らが研究会の主要会員として活躍していらつしやいます。

この度第41回研究会当番会長に私が指名され、平成26年8月22日 (金) 23日 (土)、東京・水道橋東京ドームホテルにおいて開催させていただきますことになりました。本研究会の名称が日本膵切研究会に変わってからは、今慶應義塾大学外科出身者として初めて開催することになり、大変光栄なことに存じております。これまでの本研究会に対する慶應義塾大学外科の伝統と実績の賜と深く感謝しております。

この研究会では、毎回膵切除術に関する数題の主題を中心とした演題発表、討議、ならびに全国アンケート調査が行われます。第41回研究会ではこれまで取り上げられることの少なかった膵切除術後の残膵にフォーカスを当てたテーマを取り上げ、アンケートを実施したいと考えております。このテーマについては、私自身が膵頭十二指腸切除術後の残膵の内視鏡観察、追跡をライフワークとして取り組んできた経緯もあり、また最近では膵管内乳頭粘液性腫瘍 (IPMN) などの膵切除術後に興味が持たれるようになっており、これまでは手術の技術的な観点、安全性の観点、根治性の観点などが主な論点であった膵切除術研究の新たな展開、さらなる発展が図れるのではないかと願っています。

東京歯科大学は平成22年に創立120周年を迎え、平成24年4月に千葉・稲毛から東京・水道橋にメインキャンパスを移し、新たな歴史に踏み出したところで、そこで本研究会はその水道橋で開催したいと考えて、東京ドームホテルを会場に予定いたしました。私ども東京歯科大学市川総合病院外科は医科大学とは異なり医局員は少なく、このような規模の研究会を担当し主催するには人手が足りないのですが、何とか第41回日本膵切研究会が充実し活発な討論の場になりま

すように精一杯準備したいと考えております。刀林会の先生方のご指導ご支援を何とぞよろしくお願い申し上げます。

## 病院紹介

### 那須赤十字病院



那須赤十字病院  
田村 光 (67回)

那須赤十字病院建設工事は、旧病院から1.9km程の中田原工業団地内で平成22年7月1日に開始されました。翌年3月の東日本大震災で旧大田原赤十字病院は外科棟を含む建物1棟が大きな被害を受け使用

不能となりましたが、新病院の方は、免震棟の1階床まで完成したところであったため、被害を受けずに済みました。震災から新病院移転までの1年4か月間、外科は入院患者を周術期患者とそれ

以外の患者の2グループに分け、被害の少なかった建物2棟に各々入院して頂き診療しました。病床数の激減で不便なことも多々ありましたが、平成24年7月1日新病院に引越し、那須赤十字病院と名称も新たに再

出発できませんでした。新病院建設の総工費は165億円、敷地面積は70000㎡、(東京ドームの1.5倍)、延床面積40000㎡、460床、地上10階屋上地上へリポート付きで夕暮れに建物内や駐車場の明かりが灯り出すと広大な土地に大変美しい景観です。近年増加傾向にある外来化学療法に対応するため化学療法センターができ、ローソンや上島コーヒー店が入りました。各種講演会を開くことができる院内最大の会議室 (マイタウンホール) には大規模災害時に多数の患者を収容できるよう医療配管もなされています。医局や事務部門は2階にありますが、エリアに入るためにはIDカード認証が必要

です。外科棟は、7階西にあります。ウィング型の構造ゆえ看護室からの見通しがよく導線も短くなっています。手術室は、8室+外来専用手術室2室で、内視鏡手術などに対応できるよう天吊りモニターが3台ついた部屋が4部屋あります。外科手術件数も、移転前に比べて移転後は月あたり15件増えました。新院長に元獨協医科大学第一麻酔科教授の北島敏光先生が就任しましたが、宮原前院長も統括管理監として残られ、現在三四会員は、24名 (外科8整形6産婦人科3脳外科2耳鼻科2形成2内科1) です。引き続きご支援の程お願い申し上げます。

## 病院紹介

### 済生会神奈川県病院



済生会神奈川県病院  
吉井 宏 (53回)

外科同窓会雑誌「刀林」も今回が第101号とのこと、誠にめでたうございませう。実は、これから紹介する「済生会神奈川県病院」も、本年9月1日の開院100周年以降は101年目に突入します。

恩賜財団済生会は、明治44年2月の「恵まれない人々に施薬救療し、済生の道を弘むべし」という済生勅語をうけ、150万円の御下賜金をもって同年5月に創立されました。当院は大正2年に全国済生会の第1号病院として開院したのですが、済生会自体は昭和27年の「社会福祉法人」改組を経て、一昨年が創立100周年でありました。山本修三先生 (38回) や

吉田一成先生 (59回)、北川雄光先生 (65回) をはじめ当院既在職者の先生方は大勢おられますが、ここで当院外科の特徴について若干紹介させていただきます。昭和40年の神奈川県交通救急センター併設以来、交通外傷を含む全般的な救急診療と癌診療を当院外科の2本柱として臨床および研究を

行つてまいりました。また、平成6年には病診連携Wの会を立ち上げるなど地域中核的病院として地域医療に貢献してきました。その甲斐もあって平成19年には心臓・循環器診療を加えて主として急性期医療等を行う横浜市東部病院 (鶴見区下末吉、現在543床) と回復期リハビリテーション、外来透析等を主な診療内容とする神奈川県病院 (神奈川県富家町、現在は187床) を済生会神奈川県支部で運営することになりました。

平成19年からこれまで、両病院が其々に経営状況を改善することに主眼が置かれてきましたが、これからは役割分担をふまえた上での両病院の一体的運営による地域への高質な医療の提供が私たちの使命であります。



エッセー

愛知医科大学について



愛知医科大学 医学部長補佐・  
外科学講座主任教授  
福富 隆志 (59回)

愛知医科大学は、愛知県長久手市(名古屋市東部に隣接したベッドタウンです)に1970年に開学した、医学部・看護学部を有する私立医科大学です。遠隔地という感じはあまりなく、名古屋駅まで30分、新幹線1時間40分で東京です。私自身も現在、同級生廣谷隆生生会中央病院副院長(心臓外科)の下で、週半日お世話になっている関係で、毎週帰京しています。とはいっても、愛知医大の主な医療圏としては名古屋市東部、長久手・尾張旭・瀬戸・春日井・小牧市などになります。医学部学生も中京圏(およびそれより西)の開業医の御子弟が多く在学されています。現在の病床数は1014床ですが、平成26年には新病院が建設され各種の新しい機器が整備されるために、今その準備に全学をあげて取り組んでいるところです。近年、世界経済が逼迫している中、医療環境は激変し、それに対応できる新しい病院、医学部教育を考

えてゆくのは容易なことではありません。外科学講座は現在、福富(乳腺内分泌・講座長)、羽生田(呼吸器)、野浪(消化器)、磯部(心臓)4人の教授で構成され、約40人の医局員を擁しています。残念ながら、外科全体で慶應大学出身者は1人もおりません。しかし、幸い今年3人乳腺内分泌外科に入学していただくことができました。現在の私の最大の仕事は、医学部管理職という面がつよく、医学部教育を考えることと、医局員のキャリアアップに全力をつくすことが私の最大の使命と考えています。私を含む乳内外科の10人の医局員を御紹介します。福富(慶應大)、中野正吾准教授(熊本大)、今井常夫准教授(名古屋大)、藤井公人講師(名古屋大)、吉田美和講師(筑波大)、高阪絢子助教(愛知医大)、毛利有佳子助教(愛知医大)、安藤孝人専修医(愛知医大)、手塚理恵専修医(愛知医大)、秋月美和医師(非常勤・久留米大)です。女性医師の比率が高く、それに実は名古屋出身者が1人もおらず、関

東人が多い(4人)のです。しかし、こうした医局員のみなさんが出身を問わず、常に「和」を忘れず、驚異的な忍耐・努力によって私を支えて下さっているからこそ、医局が成り立っているのだと心の底から医局員のみなさんに感謝しています。おかげさまで、愛知医大は私にとって現在までのところ、一番働きやすい病院となつていきます。私も必死に1人1人を応援し、各種資格・学会役職などを取得できるような全力で尽くしています。また、中京地区にいる慶應(関連)大学の若い先生方にも少しでも力になれるよう、各方面にapproachしていろいろなpostを提示するべく努力しています。優秀な医局員のおかげで、愛知医大の乳内外科は大きく前進した、と自負しています。やがて私も退職したら、現在の東京の家にまどろむつもりです。その節はまた刀林会の先生方に御迷惑をおかけし、お世話になるかと思えます。今後ともどうかよろしくお願

い申し上げます。慶應義塾大学病院を離れて、新設名古屋保健衛生大学病院(現藤田保健衛生大学)へ赴任のため、昭和48年4月に東海道新幹線に乗り名古屋に向かっていた。樹木が茂った丘陵の間を通り抜け、急に視界がパッと明るく開け、広大で平坦な草地になり、これが濃尾平野なのだと思つたと同時に、「木がない」のに気付いた。木のない所に人は育たない? 車窓の遙か遠くに入。あれが名古屋保健衛生大学病院で、これから自分を育て、国内外に発信して行く源になる拠点であると思うと興奮した。東京駅を出た新幹線は、1時間32分、次は停車名古屋に着いた。品川も新横浜も停まらなかつた。

以来40年が過ぎた。名古屋は大きく変わった。当時は、読売新聞がなく中日新聞、三越もなく松坂屋、キッチン醤油、銀行は東海銀行、東急系、西武系がなく名鉄系、日産よりトヨタ、病院と医療は名古屋大学系と中京圏の文化そのものであつた。それまで、名古屋地区では愛知県がんセンターで食道外科、後の病院長故唐沢和夫(29回)、高木巖(48回)が、野垣病院では、故野垣茂吉院長(17回)、故升森茂樹副院長(37回)、富士病院では、故深谷藤一院長(19回)、深谷皓孝院長(48回)が活躍していたが、昭和46年に名古屋保健衛生大学が新設されてから、愛知県三四会員、刀林会員が急速に増えた。

名古屋保健衛生大学病院の1帯は、香掛城下に窪田が広がり、田楽が盛んに踊られていた事実から、病院の住所は「香掛町田楽が窪1-98」である。大学本部のすぐ裏には、桶狭間古戦場の碑がある。桶狭間の合戦は、思いのほか知られていないが、優勢であつた大群を率いた今川義元公、その娘婿松平元康、後の徳川家康等が織田信長公に破れて、時代が大きく変わった戦いであつた。織田信長公の尾張の統一となつた。今川義元の墓は古戦場にある高徳院にある。昭和48年に開院した名古屋保健衛生大学の外科は、

故青木春夫教授(33回)、故吉崎聰教授第2教育病院長(36回)、故守谷孝夫助教(39回)、船曳孝彦講師(40回)後に病院長、大を学長を務めた、神野哲夫講師(44回)後に教授、病院長、丸田守人講師(44回)後に教授、佐々木哲二講師(44回)後に東海大学外科学科教授等が核であつた。地元の外科学科からは、「慶應が殴り込みに来た」と言われたが、決してそうではなく、淡々と慶應外科を進めていたのである。名古屋保健衛生大学の学校名も、藤田保健衛生大学に変わった。その理由は、地名が付くのは官学、公立であり、私学の世界一流は個人名が多いという。大学の発展と共に多くの刀林会員が育つて活躍している。

昨年10月に、東南アジアの発展途上国で必要な医師、看護師など医療従事者の指導や医療を支援し、育てる目的で、名古屋を拠点として、特定非営利活動法人国際医療連携ネットワークを神野哲夫理事長の基、船曳孝彦理事等と立ち上げた。今、国際的な情報交換、医療連携を、一步一步着実に活動を進めている。是非、ご協力をお願いします。終わりに、藤田保健衛生大学を退職した先生も入れ、刀林会員を挙げると、蓮見昭武教授(45回)、落合正宏教授(47回)、佐野公俊教授(49回)、松本純夫教授(52回)後に第2教育病院長、現東京医療センター病院長、島津元秀講師(53回)後に東京医科大学教授、梅本俊治教授(54回)、丸上善久講師(56回)、黒水丈二助教(56回)、前田耕太郎教授(58回)、宮島伸宜講師(61回)後に聖マリアンナ医科大学教授、杉岡篤教授(61回)病院副院長、桜井洋一教授(61回相当)、内海俊明教授(62回相当)、宇山一朗教授(64回相当)、守瀬善一教授(66回)第2教育病院副院長、廣瀬雄一教授(66回)、加藤悠太郎(71回)、稲垣大司准教授(71回)、林拓郎講師(74回)、須田康一(79回)などその活動において、地元名古屋大学外科、名古屋市立大学外科、愛知医科大学外科をリードしている。一般病院においても新川中央病院では安達一真院長(44回)、医院では松岡宏彰(44回)、森下幹人(49回)、丸茂病院(乳腺外科)では、竹内透院長(65回相当)等が著明に活躍している。今後、益々慶應外科が名古屋地区、東海地区で確固たる基盤で発展して行くことを確信している。

エッセー

名古屋は変わった  
名古屋保健衛生大学病院  
開院と共に40年



三恵会服部病院 特別院長  
藤田保健衛生大学名誉教授  
丸田 守人 (44回)



留学報告

ボストン留学

Massachusetts General Hospital, Harvard Medical School, Boston, USA Department of Radiation Oncology



落合 大樹 (77回)

私は2012年6月から米国・ボストンのDepartment of Radiation Oncology, Massachusetts General Hospital (MGH), Harvard Medical SchoolでPostdoctoral Fellowとして腫瘍血管新生の基礎研究に従事しています。ボストンは米国の独立先生の始まった古都であると同時に、ハーバード大学やMITなどの学術界での主要施設を擁する米国の頭脳と言えるところです。そのハーバード大学の関連施設の中でもMGHは全米最古の病院であると同時に、業績的にも経済的にもNIHの生命科学研究所の最有力拠点と言えます。

所属研究室は、放射線腫瘍学に属しており臨床部門では放射線治療計画だけでなく、新規分子標的治療薬と化学療法を併用した臨床試験も行っています。基礎研究部門では幅広く固形腫瘍の血管新生、微小環境に関する実験を行っています。

オハイオ留学

開頭をしない脳外科手術を求めて



武藤 淳 (81回)

近年はこれらに加え新治療法の開発、化学療法効率化、臨床試験の付随研究など様々な研究を展開しています。研究室は夜間まで常に明かりが消えることなく、熾烈な競争が展開されています。私自身自己の研究能力を磨き、室の高い研究に接する格好の場所であると印象を持っています。

米国と日本では生活のペースが全く異なりますが、研究室の人達はお互い理解しあえるように努力してくれれます。人種・国籍・研究のつづの様な研究室から科学と同時に多民族国家米国という国について多くを学んでいる日々です。末筆になりますが、留学に際してご高配・ご指導をいただきました北川教授、北島名誉教授、相川名誉教授ならびに外科学教室の諸先輩方に深く感謝いたします。

脳神経外科吉田教授のご高配を賜りまして、2012年4月よりアメリカ・オハイオ州立大学脳神経外科に留学させていただきました。オハイオ州立大学のあるコロンバスは、クリーブランドやシンシナティなどの歴史ある街とは違い、現在も成長し続けている州都です。Hondaの巨大な工場があり、多くの日本人が住むため、アメリカの風と日本の風のどちらをも感じることができ環境で勉強に勤しむことができます。この上ない幸せなことなのかもしれません。

思っていることを的確な言葉で伝えることの重要性を痛感させられました。脳神経外科も耳鼻科も、アメリカでレジデンシーを獲得するのは、なかなか難しいことであるため、強く自己アピールする傾向があるように感じますが、その中で、仲間を尊重し気遣いながら「意志」を伝えることの難しさと大切さを実感しております。

また、世界各国から人々が集まっていることで、日本という国や文化を説明する機会が多くあります。日本を離れ外国で生活すること、日本人であるということ、日本を再認識させられ、また、日本という国や文化を今までは違った視点で見ることができるところが、さらに、それぞれの背景に異なる文化を背景にしているため、日々多くのことに気づかされます。まず、考えていることや

ていくことができるという機会はとても貴重な経験であり、いつも奮い立たされております。現在、脳腫瘍に対する低侵襲手術、つまり、経鼻内視鏡頭蓋底外科手術の研究を行なっております。具体的には、両方の鼻孔より2.7mmもしくは4mmハイビジョンの内視鏡を挿入しinstrumentsで腹側頭蓋底病変を手術する方法を研究、そして習得中であります。レジデント時代、頭蓋骨に穴をあけ、脳を触る手術をしているうちに、侵襲を与えないでも手術はできないものかと感じることが多くなりました。2010年の河瀬名誉教授が主催されました神経内視鏡学会にて招待されました。out of the live surgery、両鼻孔よりinstrumentを挿入し、見事にdissectionを披露された手術を目の当たりにし、衝撃を受けました。その衝撃は、「開頭せず手術ができれば、患者さ

ら、外科の各areaの手術において、ロボット手術や低侵襲手術の方向へ向かっていく中、脳外科にも、その概念が導入されてきました。腹腔鏡、胸腔鏡などと同様に、適応疾患の選択をする必要があります。しかし、顕微鏡下の手術で行う細かい作業を、内視鏡下で行うことは、十分なtrainingだけでなく、内視鏡下での特殊なskillも必要とされるとともに、経鼻からの解剖学的知識を要します。この手術は、腹腔鏡と同様に、カメラ下での2Dの画面を見ながら、鼻腔というworking areaが限られた中で手術を行っていきます。両鼻孔より、内視鏡を挿入し、さらにinstrumentsは2本しか挿入することができず、およそ18cmの長さのinstrumentの先端で、切ったり、剥離したり、骨を削ったりという操作を行い

ます。さらには、止血や剥離、そして摘出の技術は顕微鏡下とは異なり、狭いスペースがゆえに内視鏡下独自の技術が確立されてきており、操作性の技術の習得にはトレーニングが必要となり、鼻腔、副鼻腔の解剖を熟知し、改めて鼻腔側から見た頭蓋内の解剖に精通しなければなりません。髄液漏、感染、といった問題はすでに解決されており、既存の開頭の頭蓋底手術に比べてかわるものではなく、ませんが、腹側頭蓋底病変には欠かせない手技となっております。脳に触れる必

要がなく、神経や血管の向こう側にある病変にアクセスする重要な選択肢の一つです。末筆ではございますが、今後、日本の低侵襲脳神経外科手術の発展に貢献できますよう、さらなる内視鏡頭蓋底外科の発展のために全力を尽くす所存です。そして、脳神経外科の低侵襲化の時代に、豊富な経験と最先端の技術、一流の施設で学ぶ機会を与えてくださいました、脳神経外科吉田教授、刀林会の諸先生方々に心より感謝とお礼を申し上げます。



# NCC から TCC へ



栃木県立がんセンター  
藤田 伸 (64回)

平成25年2月に、国立がん研究センター(NCC)中央病院から栃木県立がんセンター(TCC)に異動となった。中央病院に平成6年8月に赴任し、18年半の在任であったが、平成元年から3年間、研究所に在籍していたので、20年以上NCCにいたことになる。

NCCは、我が国のがん研究、診療の総本山と言われるが、本当にそうだろうか。現在、それだけの内容を持つているのかと問われれば、そうではないと答えざるをえない。なぜなら、今、多くのがんに対して、一定レベル以上の施設であれば、NCCと同じあるいはそれ以上の診療ができるからである。研究もしかり。しかし、多くの患者さんは、日本最高のがん診療が受けられると思いき、来院する。そのギャップに私自身ずっと困惑していた。

2013年2月13、14日に Keio-Chiang Mai CVT Workshop がタイのチェンマイ大学病院にて開催されました。チェンマイ大学医学部と当科は2008年に吉武講師が留学して以来人的交流を続けており、今年度も当院から保土田先生が、チェンマイ大学からはレジデントの Charatarn 先生らが来られるなどの交換留学を続けております。



慶應義塾大学  
外科(心臓血管)  
伊藤 隆仁 (87回相当)

2013年2月13、14日に Keio-Chiang Mai CVT Workshop がタイのチェンマイ大学病院にて開催されました。チェンマイ大学医学部と当科は2008年に吉武講師が留学して以来人的交流を続けており、今年度も当院から保土田先生が、チェンマイ大学からはレジデントの Charatarn 先生らが来られるなどの交換留学を続けております。

初日は Weerachai 外科主任教授よりチェンマイ大学の現況に関してレクチャーしていただき、お互いの低侵襲手術に関する意見交換が活発に行われました。



チェンマイ大学でのライブ手術を終えて  
(左から) Dr.Weerachai (チェンマイ大学 外科主任教授)、Dr.Lansac (IMM フランス)、四津教授、工藤准教授、伊藤

# チェンマイ大学との心臓手術

手術指導と手術器具の供与により合同チームであったにもかかわらず、当院での手術と同じように進行することができました。当科の技術が世界でも通用することが実感できました。

午後には両大学間の大動脈手術に関する講義が志水講師および Sun 先生よりありました。こちらでも活発な議論が行われました。二日目は世界的に有名な Lansac 先生がパリから来られ、大動脈弁形成術の講義と手術が行われました。

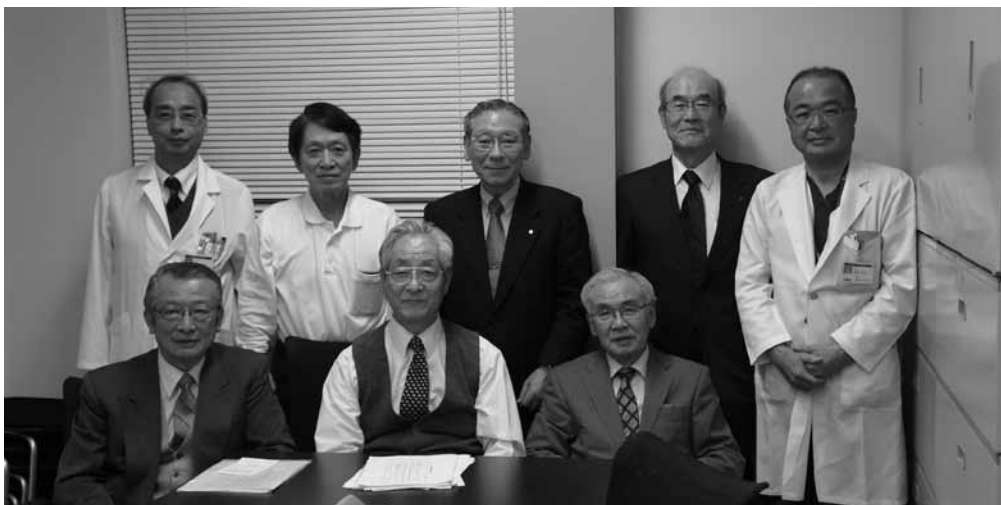
# 刀林賞論文選考委員会報告



委員長  
田中 勸 (38回)

平成24年度刀林賞論文については、予め、平成24年5月機関誌刀林紙面上公募しました。応募を受けたのは左表の5論文です。

| 氏名    | 回生     | 所属                   | 論文タイトル   |
|-------|--------|----------------------|--|
| 笠原 啓史 | 75 回相当 | 国立病院機構埼玉病院 心臓血管外科    | Postoperative Renal Function After Juxtarenal Aortic Aneurysm Repair With Simple Cross-Clamping  |
| 下島 直樹 | 76 回   | 東京都立小児総合医療センター       | 腸管神経再生治療の実験的検討 -胎仔無神経節腸管への神経堤幹細胞移植-  |
| 神谷 一徳 | 80 回相当 | 横浜市立病院呼吸器外科          | KL-6 and CEA levels in epithelial lining fluid microsamples predict response to gefitinib in patients with advanced non-small cell lung cancer |
| 高橋 里史 | 81 回   | 脳血管研究所付属 美原記念病院脳神経外科 | Downregulation of uPARP mediates cytoskeletal rearrangements and decreases invasion and migration properties in glioma cells                   |
| 吉川 貴久 | 82 回   | 荻窪病院                 | High-dose immunoglobulin preparations improve survival in a CLP-induced rat model of sepsis  |



前列左より、小平委員、田中委員長、山本理事長  
後列左より、吉田教授、高見委員、土屋委員、安藤委員、四津教授

追悼

故伊藤國彦先生 (27回) を偲んで

伊藤病院学術顧問  
帝京大学医学部外科名誉・客員教授  
高見 博 (49回)

衝撃的な電話を伊藤公一院長から受けたのは平成23年11月の冷えた夜でした。進行食道癌という病態の中、病魔と闘う國彦先生の意志はだれよりも強く、ご家族・病院の職員の愛に満ちた優しい介護を受け、慶應病院では北川雄光教授をはじめ懸命の治療が始まりました。外科医として病気のことを知り尽くしている國彦先生にはさぞかしつらかったと思いますが、病気に立ち向かうその姿勢に國彦先生の「生きざま」を感じました。



平成 19 年 8 月 16 日 伊藤國彦先生のご自宅の玄関前で

國彦先生は大正2年に生まれ、昭和23年に慶應義塾大学医学部を卒業されました。誰よりも「慶應」を愛されていました。昭和33年に伊藤病院に就職し、昭和34年から平成9年まで院長に就任されました。その後3代目院長として公一先生が引き継いでおります。昭和53年には日本医師会最高優功賞受賞、昭和58年には慶應義塾大学外科客員教授となられ、一方では同窓会会長としても長らくご尽力されました。その他のご役職は枚挙にいとまができません。

長として公一先生が引き継いでおります。昭和53年には日本医師会最高優功賞受賞、昭和58年には慶應義塾大学外科客員教授となられ、一方では同窓会会長としても長らくご尽力されました。その他のご役職は枚挙にいとまができません。「櫻の道」にある伊藤病院は甲狀腺専門病院として、国内はもろろんのこと世界でも有数の病院として進化してきました。古く、昭和30年には日本で最初のバセドウ病に対するアイソトープ治療を開始し、その後も高価な放射線治療装置

などを導入されてきました。その先見性に立脚する知見とその膨大な臨床実績に基づき、日本における「甲状腺疾患の診療体系」の基盤を作られました。私は國彦先生を1、2週ごとにお見舞いに行くにつれ、先生の未来を見据えながら、今日の「王道」を一步、一步優しく、そして確実に歩まれてこられたことに改めて感動いたしました。

國彦先生は6年半前に最愛の奥様、裕子さんに先立たれました。その深い悲しみを乗り越え、「医学の道は「心」であり「思いやり」である」と、言葉でなく行動で示され、生涯現役を貫いてこられました。

しかし、慶應の先輩、後輩から「クニさん」の名で愛された國彦先生は平成24年11月17日、その生涯を共に歩んできました伊藤病院の職員に見送られ89歳の人生の幕を閉じました。その日は、いみじくも「伊藤病院開院75周年」にあたります。それは國彦先生の誰にも見せなかつた「執念、魂」なのでしょう。今、伊藤病院は公一院長によりさらに発展しておりますので、ご安心ください。

青木先生は慶應義塾大学医学部を昭和49年3月に卒業され、外科学教室へ入局されました。はじめに伊勢状態院で研修され、平塚慶應病院、国立療養所神奈川市民病院、国立療養所神奈川病院の外科などを経て、昭和52年慶應外科医局へ帰任され、チーフレジデント終了後永寿総合病院へ出向されました。昭和59年6月から浜松医科大学外科学第2講座阪口周吉先生の下へ

追悼

故青木克憲先生 (53回) を偲んで

浜松医科大学学長  
中村 達 (49回)



先生は大病院の高度救急医療のあり方を考え、十分な責務を果たしてこられました。専門医制度が進展していく中で、救急医学を専門とする医師たちが少なく、急性期医療のニーズばかりが要求され、浜松市内の6病院で輪番制による救急当番を自分でも当直するような過酷な仕事を愚痴一つ言わず、毎日をこなしておられたことは大変だったろうと思います。私や今野教授の外科学講座から医師を派遣するなどの協力を惜しまなかつたのですが、最終的に救急医学を生涯の専門として選ぶ医師が少ない今の時勢が青木先生の教授

としての毎日が大変なものになっていた理由でした。青木先生の体調がよくないとの話を聞いたのは4年前でした。ご本人が健診で尿蛋白が出ていて、それがBence-Jones蛋白とわかると、ご本人も大変なことでたとえ覚悟されていたようでした。血液内科の医師には一生懸命頑張ってもらいましたが、寛解のインターバルがどんどん短くなっていき、それでも病室にパソコンを運び込み、2011、3、11の東日本大震災関連支援の指示やコーデイナーの連携の指導を最後まで続けられました。「そんなことはどうでもいいから休んでいてよ」と言っても責任感の強さからパソコンを手放されませんでした。平成24年7月3日63歳11ヶ月で逝去されました。まだお若いのに本当に惜しい人でした。青木克憲先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。



# 追悼

## 故戸倉康之先生(41回)を偲んで

栃木県立がんセンター  
名誉院長  
尾形 佳郎 (41回)



41 回同窓会の幹事 (2011.11.12)

平成25年2月15日に多発性骨髄腫のためご逝去されました。心房細動、高血圧、高尿酸血症にて同級生の高野篤君に診療を受けている際に診断を受け、以来約4年間の闘病でした。

戸倉君は慶應高校から医学部に進学し、昭和38年に外科入局。日立製作所多賀総合病院に勤務後赤倉一郎教授の主宰する食道外科を選択し、以来私も同じ教室で消化器外科医を目指すこととなりました。彼は中山隆市先生(32回)の指導のもと、食道の機械吻合の実験を犬で行っていました。私が、私の臓器保存の実験も犬でしたので、お互い夜遅くまで犬舎にいることが多

く、実験の手術術式、臨床応用などを語り合った事を思い出します。彼はまた迷走神経と腸管血流の関係を研究し、この研究に関連して昭和45年から2年間ニューヨーク州立大学バットファロー校留学。国立栃木病院勤務後、昭和52年から坂口周一教授が主宰する浜松医科大学第二外科講師として上部消化管外科を担当しました。昭和62年浦和市立病院(現さいたま市立病院)外科部長、平成8、15年病院長。平成15年から丸山記念病院院長。

彼は外科医の育成に努力し、平成8年から平成23年まで日本臨床外科学会で常任幹事を務め、特に支部委

員会委員長として外科医希望者の増加と若い外科医に対する教育の充実を日本臨床外科学会が果たすべく熱心に訴えていたのが強い印象です。私も栃木県支部長としてこの委員会に参加しておりましたが、各支部の活性と支部の増設など活発に討議したのを忘れません。その結果として、本年の支部数は23から45へと増加しております。さらに若い医師の教育については日本医学教育学会にも所属し、特に医学教育用語集の編集にも携わりその業績から第44回日本医学教育学会から医学教育賞を授与されています。

臨床家として後輩思いの優しさや臨床に対する強い情熱を持ち合わせていました。彼の性格は真面目で温厚、困窮を愛する同級生間でも紳士として皆が認めるところでした。一昨年のクラス会は幹事として、殆ど飲食も出来ず皆の世話をしていたのが忘れられません。最後にになりましたが、ご息子の戸倉英之君は現在足利赤十字病院で乳腺外科医として活躍中です。

戸倉康之君のご冥福を心からお祈り申しあげます。(77回)、高橋麻衣子(79

# 診療体系グループ紹介

## 乳腺班



慶應義塾大学  
外科 (一般・消化器)  
神野 浩光 (66回)

乳腺班では手術療法、化学療法、内分泌療法、分子標的療法、放射線療法を組み合わせ集学的な治療を行っており、具体的な治療方針はすべてカンファレンスにて決定しています。治療方針の決定に当たっては現存するエビデンスを踏まえた上で、個々の患者さんの社会的および個人的背景やクオリティオブライフまで考慮に入れたtailor-made治療を心がけており、同時に未解決のクリニカルクエスチョンに対応可能な次世代のsurgical oncologist養成を念頭にレジデントの教育を行っております。チーム医療を目指し、放射線診断科、病理診断部、放射線治療科および形成外科との定期的カンファレンスも行ってまいります。現在の乳腺班は、スタッフとして林田哲

回相当)、レジデントは関朋子(85回)、村田健(86回)、松本暁子(86回)およびカザフスタンからの留学生 Aisulu Zhussupova で構成されております。年間手術件数は約200例であり、年間の外来化学療法は術前後の補助療法、再発治療を含めてのべ1500例に行っております。

臨床研究としてはセンチネルリンパ節微小転移症例における腋窩郭清省略の有用性を検討する第II相試験を施行中です。さらに、ACOSOG Z0011トライアルに合致する症例におけるセンチネルリンパ節マクロ転移に対する郭清省略の第II相試験も開始しております。HER2陽性乳癌に対するラパチニブとトラスツズマブのdual blockadeによる術前療法としての有用性を確認する第II相試験も施行中です。この試験は

# 脳神経外科



慶應義塾大学  
外科 (脳神経) 教授  
吉田 一成 (59回)

慶應義塾大学医学部と米国のテキサス大学MDアンダーソンがんセンターおよび聖路加国際病院の3施設の医師が共同で治験の立案を行い、また米国の国立がん研究所(NCI)と共同の臨床試験として、日本の規制当局のみならず米国の規制当局のルールに準拠して行っているものです。また、MRIでのみ描出される病変に対する診断方法として、超音波とMRIの同一断面をreal-timeに同期して描出するVolume Navigation (V-Nav) という技術を用いた新しい生検の有用性を検証中です。慶應連病院全体では1年間の新規乳癌手術症例は2000例を超えております。この豊富な症例数に加え、慶應外科の強固なネットワークを用いた臨床試験システムも稼働しており、トリプルポジティブ乳癌における分子標的療法と内分泌療法併用の第II相試験が現在進行中です。

基礎的研究としては乳癌のホルモン感受性を制御する新たな遺伝子の同定及びそのメカニズムの探索、薬物療法の個別化および最適化を目指した血中および腫瘍内の薬剤代謝物の濃度測定(臨床薬剤部との共同研究)、唾液メタボローム解析による新たな乳癌診断法の確立(東北大学および慶應鶴岡キャンパスの先端生命科学研究所との共同研究)を進めています。また、乳癌の薬物療法耐性に関わる新規遺伝子変異の検出および転写因子の制御による乳癌薬物療法の耐性克服の研究にも取り組んでおります。

慶應義塾大学脳神経外科では、脳腫瘍、脳血管障害、機能的疾患、小児疾患を中心に診療を行っております。2013年4月からは、スタッフ7名、専修医6名、ポストチーフ大学院生5名の計18名で、診療、研究、教育を行っております。近年、脳神経外科領域では、治療法も多様化し、治療方法も手術をとっても、従来の顕微鏡手術、定位脳手術などに加え、内視鏡手術なども導入され、血管内治療や、脳腫瘍の個別化補助療法など、また、定位照射を踏めた様々な放射線療法の開発があり、多様性が増しています。予定手術のほとんどは、紹介患者で、脳腫瘍が半数を占めます。お家芸である、髄膜腫、神経鞘腫などの頭蓋底腫瘍に加え、命の頭蓋底腫瘍に加えて、下垂体腺腫、脊索腫などの斜位部腫瘍などの内視鏡手術の対象患者、高度な術中モニタリングなどを必要とし、適切な補助療法を要する、神経腫瘍などの悪性脳腫瘍患者も多く治療しております。一部の悪性脳腫瘍に対しましては、ペプチドワクチンを用いた免疫療法の先進的な治験を行っております。脳血管障害領域では、近年、脳ドックにより発見される機会の多い、脳動脈瘤の治療や、くも膜下出血などの脳卒中などに対して、従来の外科的治療のみではなく、コイルやステントなどの、血管内治療も積極的に取り入れております。症例によっては、血管内治療、手術、あるいは、放射線治療の組み合わせを行うこともあります。機能外科では、微笑血管減圧術が有効な、片側顔面けいれん、三叉神経痛に加え、パーキンソン病、疼痛などに対する、脳深部刺激療法なども行っております。小児脳疾患に対しましては、本年4月から、専門スタッフが加わりましたので、これまで以上に、守備範囲を広げていけると思います。慶應義塾大学脳神経外科の診療は、ほとんどが紹介患者で、成り立っておりますので、今後ともよろしくお願いいたします。

# 腸班



慶應義塾大学  
外科 (一般・消化器) 准教授  
長谷川 博俊 (66回)

腸班は現在 (2013年4月1日現在) 4名のスタッフ (長谷川博俊(66回)、石井良幸(70回)、岡林剛史(78回)、鶴田雅士(79回)) で、外来診療および年間約280例の全麻手術症例を担当しております。症例の内訳は、癌・180例、潰瘍性大腸炎・20例、クローン病・30例、その他となっております。腹腔鏡下手術の割合は増加しており、結腸癌では stage III までの症例と stage IV の一部、直腸癌では側方郭清を必要とする症例以外を適応としております。また、潰瘍性大腸炎は緊急手術以外ほぼ全例、クローン病も大多数の症例を腹腔鏡下に行っております。

また、近年、大腸癌に対する化学療法は、分子標的薬を中心に著しい進歩を遂げております。内科でも化学療法を行っておりますが、まだ、大学においても外科医が化学療法を行う機会が多いのが実情です。関連病院においては、さらにその傾向が強いため、レジデント諸君には定期的な勉強会を開いて、最新の知識と安全に化学療法を行うた

めノウウハウを教えてください。

腸班では木曜日朝7時より抄読会、金曜日朝7時半より症例カンファレンスを行っております。特に症例カンファレンスでは、消化器内科、腫瘍センター、放射線科の先生方と手術適応、術式をはじめ、再発症例に対する治療方針、代替治療、さらに婦人科など他診療科からの症例も検討しております。さらに、今年より胆道班カンファレンスにおいて、肝転移症例を検討するカンファレンスを

行っております。研究面では分子標的薬、抗がん剤を中心とした薬剤感受性とその機能解析、ナノカプセルを用いたターゲット療法の開発や分子標的薬のADC活性に関する研究、肥満と大腸癌発生に関する研究なども行っており、また、関連病院とともに多施設で phase VII の臨床研究も行っており、その成果は国内外での学会において発表しております。今後ともご指導ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。



# 開業記

## 代官山内科外科クリニック



深瀬 達 (64回相当)

昨年の十月に渋谷区の東急東横線代官山駅より徒歩4分の場所にクリニックを開業致しました。開業とは言っても一年半前までは千代田区日比谷公園で診療所をやっておりましたので全くの新規というわけではあ

りませんが、代々引き継がれ私自身も20年間に渡り診療の場としてきた日比谷の地を離れ、現在の代官山に移りましたので全く新たな気持ちで診療に励んでおります。およそ二年前前に突然の大

病(原因不明の敗血症)により、駒沢の東京医療センターに緊急入院となり、約1ヶ月の入院生活を送りました。無事に生還(やや大袈裟ですが)したものの退院時の体重は60キロを下回り、従来通りの診療業務、院長業務の継続がしばらくは困難と判断

し前地の日比谷医院を平成二十三年三月に閉院しました。その後は再起を期して体調の回復に努め、新たな開業の地を探しておりましたが、私が生まれ育ち35年間住み慣れた中目黒の実家から徒歩10分ほどの場所に開業する機会を得ました。日比谷のオフィス街からお洒落な若者の街への大転換となりました。来院される患者さんも男性中心から男女が半分ずつへ、また小児の患者さんもみえるようになりました。これは前の日比谷の地がむしろ特殊地域(住民はほぼゼロ)であり、多くの開業されている先生方からみれば当然の事と思われれます。

日比谷時代に比べ診療所の規模は医師が12名から私を含め2名(皮膚科非常勤が週に半日1回)に、職員は10名から3名へと大幅に縮小されました。しかし、時流に則り電子カルテの導入や院内LANによるペーパー・フィルムレスによって効率化をはかり、少数精鋭でダウン・サイジング・コンセプトの実現を目指しています(これもあえて強調すべきでもない開業医として普通の形ですが)。大正2年に曾祖父深瀬周吉が開業した深瀬病院に始まり、日比谷病院日比谷医院そして代官山へと代々引き継がれてきた医業は本年10月で100周年を迎えます。奇しくも刀林新聞は今号で101号との事ですが、今後も刀林会の会員皆様と共に頑張っていきたいと思っております。

# 開業記

## 馬車道慶友クリニック



古根 清和 (63回)

昨年十二月に横浜馬車道に「馬車道慶友クリニック」を開院いたしました。当院では、地域の信頼できるかかりつけ医を目指し、最先端の診断機器を用いて、高度先進医療の現場である慶應義塾大学病院で培われた臨床経験と技術をできる限り日常診療に活かすと共に、個人クリ

ニックでなければできない、きめ細かなサービスを提供し、質の高い医療を実践していきたいと考えております。煉瓦で舗装された道や、街路のガス灯が、暮れ時の面影を感じさせる馬車道のタイムスリップした雰囲気と一体となるよう内装にも工夫を凝らし、「病は気から」を

重視し、患者様がお帰りの際は、明るい笑顔で赤レンガ倉庫へ向かいたくなるようなクリニックを目指したので、お近くへお出ましの際は、是非一度お立ち寄り頂ければ幸いです。

開院から早5カ月が経過しようとするところですが、近隣のみならず遠方からも

多数の患者様に御来院頂き、皆様に励まされる毎日です。内科・外科のクリニックなのですが、鎖骨骨折や来院途中に転倒し大腿骨頭骨折した患者様が来院され、レントゲン写真の撮り方がよくわからず、あたふたするなど多岐にわたって勉強の日々が続いております。そんな中、近隣にいくつか病院をはじめ、済生会横浜市東部病院、川崎市立川崎病院、川崎市立井田病院と日頃親交のある刀林会員の先生方が在籍なさる基幹病院があ



私の著書

Dr. さとうの頭蓋底手術スキルアップ

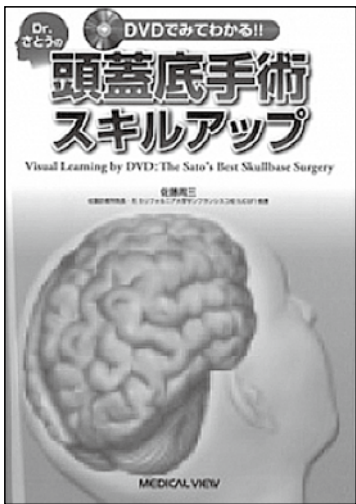


佐藤診療所

佐藤 周三 (56回)

cadaver dissection course は献体を使って解剖を勉強したり、手術の練習をするものであるが、何度か参加して大変勉強になると思っていた。その後、フロリダのロートン先生を訪ねて cadaver に関するノウハウを勉強しに行った。そのノウハウを用いて、1993年に群馬県的美原記念病院に出張中、微小解剖ワークショップを開催した。

河瀬斌名誉教授に、若手の脳神経外科医に手術を教えるように言われ、戸谷重雄名誉教授の下に導入された cadaver でのトレーニングシステムを用いて手術の練習を行なった。効率的に手術を学ぶためには、手術に対する哲学と解剖が重要であると痛感し、頭蓋底の臨床的な解剖を理解してもらおうと考え本書を作成した。1997年より慶應義塾大学で毎年 cadaver dissection course が開催され、お手伝いをさせていたが、毎年新しい知識の発見がある



のにはいつも驚かされる。cadaver dissection は手術の技術、解剖を学ぶのに最適な機会である。参加する前に本書を一読していたら、術後に予期せぬ病態が出現したときにいつでも対処できるように気を配る必要がある。本書は主として、技術的な側面に重点をおいて記したが、前著 (Dr. さとうの「臨床で役立つ、2009年、メジカルビュー社」) にても強調したことであるが、外科医 (外科医に限らないと思う) が、人間性、哲学、教養であることを再び強調した。

外科 (血管外科) 渋谷 慎太郎



近況報告

76回生

平成9年に東京医科大学 (相撲部) を卒業し、慶應義塾大学外科学教室に入局させて頂きました。サブスペシャリティーとして血管トチーフ出張として、日本鋼管病院で2年間、川崎市立川崎病院で7年間、消化器外科3割・血管外科7割のペースで修練を積ませて頂きました。昨年4月から、より高度な環境で血管

外科を追求するため、済生会横浜市東部病院に異動させて頂きました。移動後は血管外科のみに特化した診療をさせて頂いており、昨年度は上司と共に下肢静脈瘤を除く350例の血管外科手術を経験させて頂きました。済生会横浜市東部病院は、外科・救急はもちろんのこと、各科の手術や学術活動が非常に活発で、非常に「勢い」がある病院だと思います。恵まれた環境で働かせて頂いており感謝する日々です。

私生活では3年前に結婚し、長男 (2歳6ヶ月)、長女 (1歳) に恵まれました。毎日のお風呂などスパー育メンを自称していたのですが、手術件数の増加で育児時間が削られつつあるのが最近の贅沢な悩みです。

教室秘書退職のご挨拶

稲益 伸江

刀林会員千二百余名の先生方におかれましては、益々ご清栄のこととご拝察申し上げます。さて私こと今年三月末をもちまして満了のため、退職の運びとなりました。後任の方の着任に伴い、四月より五月、六月とかけまして引継ぎ業務を行わせていただいております。思い起こしますと私も、入職を致しました当時は右も左も分かりませんでした。伝統ある慶應義塾大学医学部の権威と、大学教育の自治という目新しい環境の中で、先生方のご指導をいただきましたこと、これまで仕事を続けることが出来たこと、失敗をした折には、自身に引き寄せた考え、本を読む等して検討しつつ、いただいたお言葉を深く理解しようと努めました。

長く一つの組織に属することが出来たので、一年また一年と歳月を重ねる中で、人とのつながりも、お仕事の内容も広がりをみせていきました。組織とはどの様なものかを感じ、お仕事を通して人生を考えました。

このお仕事を通して知り得た知識や、いただいた人間関係は沢山ございます。そうした経験が源泉となり、私が少しでも成長出来たのは、このお仕事に出会えたものと、心より感謝申し上げます。

更に一昨年前より私の両親に対しましてのお手厚いご加療を通し、先生方のお仕事の大変さを知ることになったのでした。それは生命の尊厳と個人の意思の尊重。

主治医の先生は「医療の現場では医師の持つ裁量権が当然に最優先されるが、それでも患者さんの職歴やこれまでの経歴に基づく、人々を導くべき」と、おっしゃって下さいました。そのために、頻りに病室にお越し下さり治療方針や病状などを、家族のみならず患者本人にも事細かにご説明下さいました。そうした積み重ねが、深い信頼関係につながっていったものと存じております。

への転床を進めて下さり、お忙しい中を、病室にもお見舞いにお越し下さいました。本来は耳鼻科に依頼が出るところを、ここは希望して呼吸器外科の先生に、気管切開をお願い申し上げました。おかげさまでスピーチカニューレも付けていただけましたので、最後まで意思の疎通が出来ました。急な病状による気管支鏡による処置にも駆け付けて下さり、よく存じ上げている先生にご診察いただき、ありがとうございました。命の尊厳と個人の意思の尊重。葬儀の際にはご供花を多数頂戴し、お足もとの悪いところをご臨席賜りまして、温かいお言葉を頂戴致しました。数々の温かなご厚誼を賜りました事を、この場をお借りしまして、改めて御礼を申し上げます。

教室秘書入職のご挨拶

宗安 真奈未



はじめまして。外科学教室の秘書として4月よりお世話になっております宗安真奈未と申します。まだまだわからないことばかりですがよろしくお願いたします。

慶應病院 外来 外科担当表

初診外来 (午前)

一般・消化器外科

北川雄光 石井良幸 板野理光 神野浩光 長谷川博俊 竹内裕也

小児外科

黒田達夫 黒田達夫 藤野明浩 星野明浩 藤野明浩 藤野明浩

心臓血管外科

田口眞一 岡本一真 饗庭秀行 志水秀行 吉武明弘 四津良平 工藤樹彦

呼吸器外科

大塚崇 後藤太一郎 河野光智 神山育男 羽藤泰 後藤太一郎

脳神経外科

大平貴之 佐々木光 三輪点 戸田正博 吉田一成 秋山武紀 堀口崇 秋山武紀

◎印 診療部長 ○印 診療副部長

特殊外来 (午前)

川久保博文 高橋常浩 坂田道生 尾原秀明 阿部雄太 長谷川博俊 後藤太一郎 高橋麻衣子

肝臓・移植 八木洋 呼吸器 渡辺真純 小児移植 星野健 尾原秀明 林田哲

肝臓・移植 石井良幸 金腸 鶴田雅士 鶴田雅士 鶴田雅士

肝臓・移植 篠田昌宏 肝臓・移植 竹内裕也 川久保博文 長崎和仁

特殊外来 (午後)

北郷実 竹内裕也 大森泰 和則仁 和則仁 和則仁

呼吸器 羽藤泰 呼吸器 羽藤泰 呼吸器 羽藤泰

食道・胃 高橋常浩 食道・胃 高橋常浩 食道・胃 高橋常浩

肝臓・移植 日比泰造 肝臓・移植 日比泰造 肝臓・移植 日比泰造

古川俊治 岡本一真 岡本一真 岡本一真 岡本一真

高橋麻衣子 尾原秀明 尾原秀明 尾原秀明 尾原秀明

脳・定位放射線 (第1) 小林正人 小田雅士 岡林剛史

機能疾患パーキンソン病 (第1) 大平貴之 堀口崇 脳神経 (第1-3) 秋山武紀

尾原秀明 尾原秀明 尾原秀明 尾原秀明

訃報

野田 辰男君 (32回) 平成 24 年 11 月 4 日 杉山 道雄君 (33回) 平成 24 年 12 月 5 日

中津 喬義君 (31回) 平成 25 年 1 月 9 日

武石 輝夫君 (31回) 平成 25 年 1 月 30 日

戸倉 康之君 (41回) 平成 25 年 2 月 15 日

岡芹 繁夫君 (40回相当) 平成 25 年 3 月 3 日

鈴木 晴男君 (38回) 平成 25 年 3 月 25 日

橋本 敏夫君 (40回) 平成 25 年 4 月 11 日

編集後記

先日、戦前の刀林会の記録書を拝見したが、外観は文字は薄れることなく会議の内容などが詳細に記載されていた。外科学教室の歴史と伝統を感じさせる貴重な資料だと思った。これらの時代はデジタル化がさらに進み利便性は向上するが、書物と違いその管理は逆に難しい。記録メディアも壊れることがあり、1クリックでデータの消去もできてしまう。不測の事態に陥らないよう、これまでの外科学教室の歴史と伝統を確実に後世に残せるようなデジタル管理体制を築かなければいけないと思う。(Y・I)

編集委員

委員長 小平 進 委員 熊井浩一郎 高見 博 大山 廉平 佐藤 周三 志水 秀行 石井 良幸 高橋麻衣子



刀林賞論文募集

左記により平成25年度の研究論文を募集します。奮って御応募下さい。

応募資格 外科同窓会会員 共著も可 (筆頭者は同窓会会員に限る)

応募研究の主題及び内容 一、外科学に密接した臨床的研究 一、外科基礎的研究

応募方法 一、氏名、所属、卒業年度 一、要旨、対象及び方法、結果、考察、結語の順に記載する。

締切り 平成25年11月30日 申し込み先 慶大外科医局内同窓会係 ※本研究論文の募集のお知らせは本紙のみに限りますので、ご留意下さい。

平成25年度

刀林会総会のお知らせ

日時 平成25年6月22日(土) 午後4時30分 場所 ホテルオークラ 別館地下二階「アスコットホール」 東京都港区虎ノ門2-10-14 電話 03-3582-0111

総会議題 一、年間報告 刀林会理事長 山本 修三 外科学教室主任 四津 良平

一、会計報告 平成二十四年度決算 会計係 秋山 武紀 平成二十五年度事業計画・予算

講演 「特定看護師・非医師診療師」の導入をめざして 防衛医科大学外科学講座主任教授 前原 正明先生

懇親会 午後六時三十分開宴 会費 懇親会 一万五千元 ※卒後十年目まで 五千円 (八十三回、八十三回生相当まで) の先生方 ※新入室者は無料